

やまとの名品 天理図書館



しんとうてんりきょうかいほんぶさいしきのず
神道天理教会本部祭式之図

増野正兵衛刊

[明治28年]

縦39.2cm 横55.6cm

教会本部での祭式を石版印刷で描いたいわゆる一枚刷り。

明治二十八年十二月号の『道の友』に「本社は本部の認許を受け、祭式図及神楽図を鮮明なる石版持て印刷したれば乞う一覽の上その価値を知り給えよかし」とある。本社とは道友社。図下にある増野正兵衛は道友社社長。

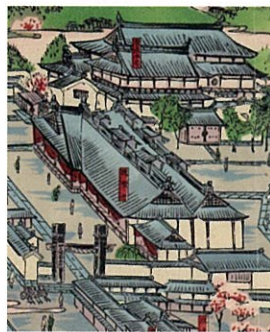
日本の石版印刷は明治初期に始まり、隆盛を極めたが明治中期以降、新しい技法にとつて代わる。石版技手はほとんどが東京で、京都と大阪にも僅かにいた。道友社はどこに依頼したのか、知る手掛かりはない。

明治二十八年と言えば、教祖

十年祭の前年でおちば近くには各分教会三島出張事務所（今の詰所）が建ち始めていた。本図は十年祭に帰参する人たちへのお土産用に作られたものではないか。

建物は飯降伊蔵によつて建てられた本教最初の神殿であるつとめ場所。明治二十一年神道部属として天理教会本部が設置される、ちばを取り囲む形で増築された。図の中央に見える窪みはちば。本来かんろだいが据えられるべき所である。カット図は同じ頃に描かれた絵図でつとめ場所の部分。

天理図書館は本図と同じような天理教一枚刷りを百点余り所



蔵している。館蔵するもので見る限り、明治二十年代から昭和十年頃まで。印刷法は様々だが共通するのはおちば帰参のお土産用であること。年祭や大祭、神殿普請の絵が多い。おちばへの帰参は費用と時間がかかった。誰でもが帰れる訳ではない。教会や家族の代表として帰参し、本部はこんな所だったとの土産話に一枚刷りは最適だった。

（天理図書館 早田一郎）